

鍋の中

村田喜代子



鍋の中



村田喜代子

著者紹介

昭和二十年、福岡県北九州市八幡に生まれる。八幡市立花尾中学校卒業。昭和四十二年結婚。現在、同県中間市に在住。昭和五十年、「水中の声」での第七回九州芸術祭文学賞受賞を機に文筆活動を始める。昭和六十年、個人誌「発表」を創刊、以来、著者自身のタイプ印刷による独自の創作発表をつづける。それら作品は「文藝界」「同人雑誌」評で高い評価を受け、「熱愛」は推薦作品として転載され、第九十五回芥川賞候補となる。「文藝界」に発表した「盟友」で第九十六回芥川賞候補、そしてこのたび「鍋の中」で第九十七回芥川賞を受賞した。

鍋の中

一九八七年八月三十日 第一刷
一九八七年十一月十日 第二刷

定価 九八〇円

著者 村田喜代子

発行者 西永達夫

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三三三
電話代表(〇三)二六五一一二二

印刷所 大日本印刷

製本所 加藤製本

万一、落丁乱丁の場合は
お取替致します

目次

鍋の中

5

水中の声

105

熱愛

147

盟友

181

装幀 坂田政則
装画 野田弘志
「空と雲」

作品集

鍋
の
中

鍋
の
中

夕方、外はまだ明るい。

台所で野菜を刻んでいると、裏口のほうからおばあさんが畑の作物を手に入ってきた。

おばあさんの畑は小さくて、そこからとれる作物も小さいものばかりである。苺、ほおずきトマト、黒とうもろこし……。そんな可愛らしいものを、それもほんのすこしずつとってくる。

「ほれ、みてごらん、たみちゃん」

おばあさんの手のひらには濃い緑色の獅子唐辛子が四、五本のせられていた。

「これを細く細く刻んで、お鍋のあがりしなに散らしたら良い色どりになるだろう」

わたしはおばあさんの手から獅子唐をうけとった。緑色の唐辛子はぬくもっている。夏の

日光に一日しっかりと熱せられていた名残りだろう。わたしはそれをまな板の上にのせてザクザクと刻んだ。

包丁を動かすわたしの耳に、遠い部屋で鳴るカセットデッキの音楽が流れこんでくる。いところのみな子は勉強をしながらカセットデッキをかけるよくない癖をもっていた。寝ころんで漫画や雑誌をみているときは、なぜかけっして鳴らさないののである。

わたしのそばには黒い大きな一個の鉄鍋が火にかけられていた。その中では野菜が小さな気泡をまわりにいっばいくつつけて、ふつふつと震えながら煮えていた。鶏肉の匂いのする白い湯気もくもくと湧きあがって、なんだか鍋をのぞくとずっと以前に小学校の修学旅行で行った温泉の熱い湯の池をおもいだしてくる。カセットデッキから鳴る音楽は、その鍋の池の上にも流れていた。

けれど台所に響いてくる音は、それだけではなかった。わたしの耳にはもつと別な音も聞えていたのである。それはみな子のいる部屋よりもっと奥の、薄暗い座敷から響いてくる古いオルガンの音色だった。おばあさんが昔小学校に勤めていたときに使っていたオルガンだ。湿気で傷んでしまっていくつかの音が出なくなっていた。だからいまひいている曲は『のばら』なのだが、あいだでぼつぼつと音の欠ける、穴あきの『のばら』だった。

オルガンをひいているのは、いとこの縦男だ。

変った名前で、——たてお——と読む。オルガンの曲を聴きながらわたしは刻んだ獅子唐辛子

を鍋にはなった。すると音の欠けたオルガンの曲だがなにしろ『のばら』の終章の部分だったので、緑色の唐辛子はまるで物哀しい雰囲気満ちて、鍋の鶏肉の上へと降りそそいでいったのだった。

台所の入口から弟の信次郎が帰ってきた。彼は毎日この家の奇妙な騒音から逃げ出して、近所のお寺の境内に学校の教科書を持って行って、そして昼寝をする。

「勉強できた？」

鍋を火から降ろしながらわたしが訊くと、

「うん」

と彼はすましてうなずいた。

今日もたつぷりと眠れたのだろう。信次郎の片がわの頬に寝たときの草のあとがついている。

「勉強は外がいちばん」

彼はそういいながら奥の部屋に姿を消した。

ここは田舎のおばあさんの家である。

わたし達四人の孫がここにやってきたのは、学校が夏休みに入った七月のおわりの週のことだった。わたしと弟の信次郎。いとこのみな子と縦男。

わたし達の祖母は今年八十歳である。骨ばかりに瘦せているがとても元気だ。

その日の昼下り、青い田んぼの中に揺れていた白い小さな日傘が印象的だった。おばあさんは田んぼの道に立ってわたし達のくるのをずっと待っていたのだった。スカートに靴をはいて、永くタンスの底にしまっていた日傘を出してさしていたのである。

おばあさんはわたし達の先頭に立って、田んぼの道を家までつれて帰った。家に入ると彼女はつめたい西瓜を切ったり、冷えた麦茶を出してきたり、ひとしきりばたたと台所と茶の間を往復したのち、一通のエアメールをわたし達の前に差し出した。

ハワイからおばあさんに送られてきた外国郵便。そもそもこの手紙がわたし達の夏休みをおばあさんの田舎に引きこませた原因なのだ。縦男がわたし達の代表者らしいもったいぶった表情で、その青と橙色の派手なふちどりの封筒を手にとった。その封筒をひと目みただけでたぶん縦男もわたしや信次郎やみな子とおなじように胸をときめかせたにちがいない。手紙の内容ではなく、ただもうその封筒の青と橙色の縞模様がわたし達の胸をドキドキさせるのである。

中をひらくと、弟の信次郎よりもうすこし下手なぐらいの文字が、こんなぐあいに並んでいた。

『 拝啓

花山苗様

私はあなたの弟である春野錫二郎の息子です

父は一九二〇年に日本からハワイに大きなゆめといっしょにきました彼はバイナッブルといっしょに生きましたそして大きな農園を私にゆずりもうすぐ死ぬでしょう家出人はさ
いごにあなたに会いたがっていますきて父にあって下さいおねがいます 敬具

クラーク
』

おばあさんが長生きをしていたおかげで、クラークさんの手紙は望み通りに届いた。

花山苗というのは彼女の名前だ。

おばあさんはバイナッブル農園のたぶん大金持であるらしい弟がみつかったことを、たいして喜ばなかった。六十年も以前の話なのである。彼女は弟の消息がわかったことよりも、この出来事でわたしやみな子や縦男の親達が大喜びして、みんなでハワイの錫二郎さんやクラークさんに会いに行つて、四人の孫達を預ることになった結果のほうをうれしがっているのだった。

わたし達の親はもう七月中をハワイの話題で電話をかけ合い、長々としゃべり合い、それからハワイのクラークさんと語り合い、いところ同士の親交を深め合つた。そして父達は会社の休暇をとるために親類の病氣見舞いと称し、たぶんそれにつづく葬式やその他もろもろの口実をつくり、母達は近所や友人に留守を頼んで、わたし達をおばあさんの家に送り出した。

周囲の騒ぎをよそに、けれどおばあさんは田んぼにスカートと靴をはいて、わたし達を迎えにきてくれたのである。

「こういうことだから」

とおばあさんはわたし達の顔をみながらいった。

「夏休みの間はついでにずっとここにおいで。おまえ達もいまのうちだよ。大きくなればバラバラになる。みんな仲良くお暮らし」

おばあさんと錫二郎という人は仲が悪かったのかもしれない、と縦男はいった。「女は執念深いからな、死んでも会いに行かないんだ」

この家に来ておばあさんがハワイの弟に関する話をしたのはそれだけだった。そんなことより彼女はたいへん忙しくなったのだ。

わたし達が到着した夕方、おばあさんは広い台所の中の全部の戸ダナをひらいて探しものに専念した。板張りの床に彼女は古い大きな鍋を並べた。探してもみつからない鍋があるらしく、おばあさんはそれを毎日使っていた頃の記憶をおもいだそうと首をひねったり頭をかしげたりする。

「大鍋がひとつ……、中鍋が、ひい、ふう、みい……と、中華鍋はひい、ふう……と」

わたしはそれらのまっ黒い、鉄の鍋の横にお尻を降ろして座りこんだ。板張りはひんやりと冷たくていつも湿っていた。

「蒸し鍋はここにあるけれど、はて、そのフタはどこだろう」

彼女はかさねた鍋をひとつひとつ持ちあげて底をのぞいてみる。しかし、蒸し鍋のフタはたぶんみつからないだろう、とわたしはおもった。なぜならフタはさっきおばあさんが背のびしてのぞいた戸ダナの上に、古い味噌桶のフタの代用として載っていたのだ。わたしが教えなにかぎりそのフタは降りてくることはできないのだった。もうおばあさんの十六とか十七になる孫達が、ふかし芋や南瓜まんじゅうなどみむきもしないことを彼女に告げてはいけないのだとわたしはおもっていたのである。

「さあ、わたしは今日からがんばらなくっちゃ」

鍋のフタをあきらめたおばあさんは、かがんでいた腰を立ててそういった。

「鍋もそろった。孫達もそろった。ではそろそろはじめましょう」

それからおばあさんは古鍋を流し台に運んで行った。きのうまで彼女の使っていた小鍋はかわりにしまいこまれた。そのとき奥の座敷からオルガンの音が流れてきた。おばあさんは水道の蛇口に手をかけたままため息をついた。古い鍋のつぎに古いオルガンが鳴りだしたのだ。

縦男は右手だけでちよいちよいとひく。彼は四人の孫の中ではいちばん年長の十九歳だった。大学に入った年の、もう絶対に今年は勉強というものをやらないと決めた夏休みだったので、縦男は家の中をのんびりながめ歩いていた。オルガンの発見は縦男のためにもおばあ

さんのためにも、なにか幸福な気分をもたらすようだった。

『のばら』をひいてみておくれ、とおばあさんは注文した。

けれどけれど、縦男のひくオルガンの音とともに作ったおばあさんの料理は、もう口ではいいあらわせないくらいまずかった。

南瓜と高野豆腐と鶏肉を煮たものであったが、鶏と高野豆腐は鍋の中でみわけがつかないほどまっ黒で、南瓜のほうはというと、もうその姿はどこにも残ってはいなかった。ぐずぐずに煮溶けてしまつて煮汁をどろどろに変える役目を果たしたのだ。

そしてこれらのものはただもう醬油辛くて、わたしの舌を縮みあがらせた。わたし達はしんと押し黙って、口を動かした。うっかり口に抛りこんでしまったものの持つて行き場がない。わたしの舌はこのひどい食べ物を乗せたまま、途方にくれてさまよっているようないである。

ところがおばあさんは、ももごと口を動かし、

「おいしい、おいしい。みんなと一緒に食べるごはんは、格別だねえ」

などといつて、たちまち小さな茶碗に二膳のごはんを食べてしまった。

わたし達はこうして田舎の第一日目から、おばあさんの作る食事に絶望したのだ。二日目はさらにひどく、三日目はさらに深刻だった。わたしはおばあさんの料理のまずさの原因は、たぶん入れ歯のせいだろうとおもつた。柔らかな食べ物を彼女はひとりで作つて、ひとりで

食べてきたのだろう。……それから彼女の入歯は上顎の天井まで覆っていたので、味の半分もかんじる能力を塞がれているのであった。

三日目の夕食の最中、いきなり信次郎は彼女にむいてこういった。

「おばあさん。明日から姉さんに作らせてよ。おれ、そのほうがみんなのためにいいとおもうんだ。おばあさんだってらくになるしさ」

わたしとみな子と縦男は茶碗をかかえたまま、首をすくめて目をつむった。おばあさんは哀しそうな表情で、お皿の中の煮崩れたまっ黒い魚に目を落したのだった。

わたしが彼女から台所仕事を委されたのには、そんなおばあさんに大変気の毒ないきさつがふくまれていた。

おばあさんは煮物が好物である。

翌日わたしがおばあさんに代って作った献立は、海老と蓮根の炊き合わせだった。わたしは信次郎を荷物持ちにして、山の下の方まで買物に出かけてそれらの材料を仕入れてきた。

おばあさんは煮物の入った盛鉢を両手にささげ持って、涙を流して喜んでくれた。

「たみちゃんがつくってくれた」

といって、盛鉢に頭を垂れて礼拝をしたのである。

わたしはあくる日は茄子と牛肉と蒟蒻の炊き合わせを作った。そのつぎの日は蕻と豚肉のため物で、そのつぎの日は鶏レバーと葱とピーマンを炊いた。鍋は毎日カラになった。